

五言絶句

題枯木寒鴉図

枯木寒鴉集

風寒操夕陽

行人与思婦

休問是何祥

(読下し文)

こぼくかんあの子にだいです
題枯木寒鴉図

こぼく かんあ あつ
枯木に寒鴉集まり

かぜさむ ゆうひ さわが
風寒く夕日に慄し。

ぎようにんつま おも ため
行人婦を思う与に

とう やめ これなん きざし
問うを休よは何の祥ぞ。

(大意)

寒い風が吹く中に夕日を浴びて鳥が葉の
落ちた木に集まって騒いでいる。

家に残した妻を気遣っている旅人(自分)
に、(鳥の騒ぐのは何か凶兆ではないか)
など、問いかけてくれ。(縁起でもな
い)

幼女詞

未知室四方

嬌痴坐閨房

随母開明鏡

慇懃学晩粧

(読下し文)

幼女の詞

しつ よも いまし
室の四方も未だ知らず

きょうちけいぼう ざ
嬌痴閨房に坐す。

はは したが めいきやう ひら
母に随つて明鏡を開き

いんぎん ばんしやう まな
慇懃に晩粧を学ぶ。

(大意)

女の子は部屋内の事もろくに判らないく
せに可愛らしく婦人部屋に座っている。

そして母のする通り鏡の蓋を開けて丁寧
に夜の化粧(寝化粧)を真似ている。

(女の子は女だなあ)

女兒五六歳

功拙未可知

唯懷小木偶

頻作愛憐詞

(読下し文)

じやうじろくさい
女兒五六歳

こうせついま べか
巧拙未だ知る可らず。

ちい きぐ たたいだ
小さな木偶を唯懷きて

しき あいれん ことば な
頻りに愛憐の詞を作す。

(大意)

女の子は未だ五六歳で物の出来不出来
など判らない。そんな事はお構いなし
に小さな木の人形を抱いて頻りに愛の
言葉をかけている。

剪綵花

妙手金刀利

剪裁偏勝真

冬日揺落日

別占百花春

(読下し文)

剪綵花

さいかをきる
みょうしゆきんとうするど
妙手金刀利く

せんざいひとえ
剪裁偏に勝真なり。

とうじつひ
冬日に揺落せる

べつ
別して百花の春を占む。

(大意)

見事な手捌きに鋭利な刃物で切り出し
てゆく様子は真に美事である。

冬の日、木々の葉はすっかり落ちてい
るのに造花作りの此処だけは特別で、
沢山の花が咲き乱れて春を独占する
のようだ。

絶世功奇哉

掌中花白開

蔓枝随意就

不復仮栽培

(読下し文)

ぜつせい
絶世の巧奇ならん哉

しょうちゅう
掌中に花自ずから開く。

まんし
蔓枝意に随ひて就き

またかり
復仮そめにも栽培せられず。

(大意)

掌中に花が自在に開き、その様子は此
の世に比較するものが無いほど美事だ。
蔓や枝も思うが俣に着けられる。

ただ地面に植えることが出来ないだけ
だ。(その事を除けば本物に劣らぬ)

兒女弄綵花

共言功無匹

不知何日開

到今未結実

(読下し文)

じじよ
兒女彩花を弄び

共に言うこと功なれども匹無。

何の日にか開き不知らず

今に到るも未だ結実せざることを。

(大意)

女の子は造花で遊びながら上手に喋ってい
るが友達が居るわけではない(独り言)。そ
して花が何時開いたか未だ実が出来ないの
は何故かなどには関心が無い。

周茂叔贊

千年道不存

纜得濂溪源

独愛泥中物

恰宜徳業尊

(読下し文)

しゅうもしゆくのさん
周茂叔贊

せんねん
千年の道不存

れんけい
濂溪の源に纜得たり。

でいちゅう
泥中の物を独り愛す

あたか
恰も徳業を尊ぶ宜しと。

(大意)

長い間、世は乱れた俣だが高潔の七、

しゅうもしゆく
周茂叔(敦頤)は晩年故郷の濂溪の奥

に落ち着くことが出来た。そして独り

蓮の花を愛した。丁度、道徳的行動を

聞筆二首

何処銀筆響

槃紘曲欲闌
清音無限恨
更帯比風寒

(読下し文)

聞箏二首

何処にか銀箏の響きあり
槃紘曲闌 ならんと欲す。
清音に無限の恨あり
更に北風の寒さを帯ぶ。

(大意)

何処からか立派な琴の音が聞こえ
槃紘曲が最高潮になってゆく。
清らかな音に無限の悲しみが籠ってお
り、それに北風の寒さが加わり、一層
物淋しさが加わった。

哀音弾不尽
腸断望郷情
始愕君家曲
明皇宮裏声

(読下し文)

哀音弾じて不尽きず
腸断望郷の情。
始めて愕 君家の曲
明皇宮裏の声。

(大意)

次々と哀しい曲が続いて望郷の念が募
り断腸の思いがしていた。そこに君の
家で初めて聞いた明るい宮廷音楽に驚
いた。(二気に気分転換した)

春暁

春夜夢難成
黎明驚鶯鳥
窓外独回頭
露轻柳嫋々

(読下し文)

春暁

春 夜夢成難し
黎明鶯鳥に驚く。
窓外独り頭を回らせば

露轻おく柳嫋々たり。

(大意)

春の夜眠れないまま朝になって鶯が鳴
く声で驚いた。それで窓の外を見遣る
と露を帯びた柳がさらさら風に揺れて
いた。(もうすっかり春だ)

題圭壁図

温潤比君子
粹精白畜光
最欽暇不掩
韞櫝任行蔵

(読下し文)

題圭壁図

温潤なること君子に比し
粹精白く光を蓄う。
最も欽にして瑕あれば掩わず
韞櫝行蔵に任す。

(大意)

上が光っていて下が四角の玉

この玉は温かく潤いがあるようで人間
でいえば人格者のようで清らかな白い
光を保っている。非常に慎み深いこと
に瑕があれば隠さず直ぐ判るので箱に
仕舞っておかれるか進退出所を誤るこ
とはない。

題別業

誰知村舎裡
却有此林泉
更誇判一飲
不用酒家錢

(読下し文)

題別業

誰か知らん村舎の裡
却つて此の林に泉有るを。
更に誇る一飲して判る
酒家の錢を不用。

(大意)

別荘に題す
村の者は誰も知らんだらう

村の外ではなく村の内のこの林によい
泉が有ることを。唯、水が湧いている
というだけではなく、自慢したいのは
一口飲めば酒など要らないほど美味な
ことが判ることだ。

送人

月夜揮鞭直
駿々万里天
馭亭君為報
何日幾山川

(読下し文)

送人

月夜鞭を揮いて直く
駿々 万里の天。
馭亭より君が為に報ぜよ
何の日幾山川。

(大意)

月夜の晩に仕事で(直は当直、宿直の
直)、馬に乗って遙か遠くへ旅する人を
送ることになった。

何日、何日、何処の山川を越えたか旅
宿から報せてくれ。

水辺送別

津頭君欲別
卒爾命征鞍
分手想思涙
漲流江上寒

(読下し文)

水辺送別

津頭君と別れんと欲す
卒爾に命ぜられ鞍に征く。
手を分てば想思して涙す
漲流 江上寒し。

(大意)

急に命ぜられて鞍へ行く
君と船乗り場で愈て別れる事になった。
手を取り合つて別れを惜しむと色々な
想いがこみ上げて涙が出た。その涙で
一層水積が増えたような川縁は淋しき
で一層寒い。

贈友人

城中多墨客

日夕琢磨功

好踐前賢跡

莫為鷄狗雄

(読下し文)

ゆうじんにおくる

贈友人

じょうちゆう

城中には墨客多く

にちゆうたくま

日夕琢磨の功あり。

ぜんけん あと ふむ よ

前賢の跡を踐が好く

けい く ゆう な なか

鷄狗の雄を為す莫れ。

(大意)

街には詩文書画に勝れた人が多く

朝晩勉強、切磋琢磨している。

昔の偉人、賢者を手本にするのは

よいがつまらぬ物真似屋になるな。

画馬

只備平時用

北風入耳閑

千金求駿骨

未敢牧華山

(読下し文)

えのうま

画馬

ひたす へいじ

只ら平時にも用に備ふれば

きたかぜのみ い

北風耳に入るも閑なり。

せんきん しゅんこつ もと

千金にて駿骨を求むれども

いま かさん あ ぼく

未だ華山に敢えて牧せず。

(大意)

普段から真逆の時に備えてちゃんと準備

しておけば厳しい状況になっても慌

てることはない。だからお金を惜しま

ず良い馬を探し求めてはいるが華山に

放牧するような事はしたことがない。

画虎

瞋目踞巖石

猛威六月寒

画成如风起

百獸敵心難

(読下し文)

えがかれたら

画虎

め いから がんせき うずく

目を瞋せ巖石に踞まり

もうい ろくがつ さむ

猛威なること六月も寒し。

えな かぜお

画成りて風起こすが如く

ひやくじゆう てきおう がた

百獣も敵心難し。

(大意)

目を瞋らせて巖石の上に踞まっている

様子は猛々しく六月でも寒気立つよう

だ。画が完成すると今にも疾風を巻き

起こして走り出さんばかりで、これ

はどんな動物も敵わないだろう。

雪竹図

勁節筆端就

操争松柏雄

雖為雪所压

真氣畜其中

(読下し文)

せつちくのす

雪竹図

勁節は筆端に就き

操は松柏と雄を争う。

雪の庄する所と為ると雖も
真の気は其の中に畜り。

(大意)

竹の強靱なことは古来詩や書に書かれており、節操の固い事は松や桧とどちらが上か判らない。雪が重く積もって押さえつけても竹の本当の気性はちやんと中に保たれている。

山水賛

背山前碧水

左樹右高楼

不籍丹青色

一掃更清幽

(読下し文)

山水賛

山を背にし碧水を前にし

左に樹あり右に高楼あり。

丹青の色を不籍ず

一たび掃けば更に幽なり。

(大意)

この絵は山があり前は澄んだ川で左には樹が茂っていて、右には高殿がある。赤や青の彩色はされていないがさつと筆を一刷きする度に一層清閑優雅な趣が加わる。

送上笠君之江都

千里秋風路

嗟君何日帰

江辺館楊柳

一別欲沽衣

(読下し文)

送上笠君之江都

千里秋風の路

嗟君何の日か帰る。

江辺の館の楊柳

一別 衣を沽と欲す。

(大意)

秋風の中を君は遠く江戸へ行くことになったが一体何時帰って来れるだろう。川辺の料亭で送別の宴を開き無事帰る事を祈って柳の枝を環にして贈ったが愈別れると涙で着物が濡れる。

瀑布

銀河従空下

碧峯聳連天

不讓廬山趣

詩成懷謫仙

(読下し文)

瀑布

銀河空より下り

碧峯聳えて天に連なる。

廬山の趣に不讓らず

詩成りて謫仙を懷う。

(大意)

滝は丸で天の河が流れ落ちて来たように、緑の山々は高く聳えて天に届きそ

うだ。この様子は李白が詠んだ廬山の瀑布にも劣るまい。詩が出来て李白を想った。

☆李白は元々地上の人ではなく天上界から地上へ流罪になった仙人。

柳上燕

輕燕穿楊柳
千条掩四隣
含泥春葉密
来去避行人

(読下し文)

柳上燕
りゅうじょうのえん

輕燕楊柳を穿ちてとび

千条 四隣を掩う。
せんじょうしりん おお

春葉に泥を含みて密に
しゅんよう どりょ ふく みつ
行人を避けて来去す。
こうじん さ ひいきよ

(大意)

柳付近の燕

燕が柳の木の間を軽やかに飛んでいる。

無数の柳の枝が伸びて周囲ずっと柳だ。燕達は若葉を採んでしつかり泥を練り合わせ巢作りに忙しく道行く人々を避けながら飛んでいる。

上巳

清流斟緑酒
上巳万家春
更想蘭亭夕
羽觴醉幾人

(読下し文)

上巳

清流に緑酒を斟み
せいりゅう りよくしゅ く

上巳万家春なり。
じょうしばんけはる

更に想う蘭亭の夕
さら おも らんてい ゆうべ

羽觴幾人か酔へる。
うしやういくにん よ

(大意)

清らかな流れの傍で美酒を飲む三月三日、桃の節句は何処の家も春の行事をしている。そこで昔、晋の王羲之が会稽山の蘭亭に文人達を集めて曲水の宴

を開いた話を想いだした。昔も沢山の人がこうして酔ったんだなあ。

訪友人

想君山水癖
詩賦為誰吟
分床不相借
杯酒醉園林

(読下し文)

訪友人

君の山水癖を想う
きみ さんすいくせ おも

詩賦誰か為に吟ずるや。
しふ た ため ぎん

床を分かちて不相借らず
とこ わ あいか

杯酒園林に酔う。
はいしゅえんりん よ

(大意)

君が静かな山水を愛する気持ちを感じる。一体誰に聞かせようとして詩を吟ずるのか。一緒に居てもお互いに気遣いなどすることなく林の中の園庭で酒を飲み交わす。